暮らしの思想

二宮尊徳の「報徳思想」と北海道開拓

北海道都市問題会議

令和3年10月27日

日本都市計画学会

地理総合支援委員会委員長

小松正明

自己紹介

- 昭和57年　北海道開発局　滝野すずらん丘陵公園事務所
- 平成7年　建設省都市局公園緑地課課長補佐
- 平成8年　長野県国営アルプスあづみの公園事務所長
- 平成14～16年　静岡県掛川市助役

  静岡県掛川市助役時代に、「報徳のまちづくり」に触れる
- 平成22～25年　北海道釧路市副市長
- 平成27年　北海道開発局を退職
- 現在は前田道路（株）北海道支店勤務

都市計画学会北海道支部
地理総合支援とは

- 高校の学習指導要領改訂で、来年4月から高校生は「地理総合」が必修となる
- 地理総合教科では、①GISで地図を読む、②日本と世界の繋がりを学ぶ、③防災教育と地域の課題を解きほぐす、の3つがテーマ
- 都市計画学会では、③の「地域の課題」解決を扱ってきているので、授業資料を作成して、地理総合授業への支援を模索中
- ③の「地域の課題」は各高校の地域の課題。美唄尚栄高校の地域課題は何でしょう？

報徳思想とは

- 江戸時代後期の農村指導家「二宮尊徳」による地域経営哲学のこと
- 二宮尊徳（1787-1856）は小田原市生まれで幼名「金次郎」
- 薪を背負って読書する「負薪読書像」は全国の小学校にPTA寄付で建てられて有名であるほか、戦後すぐの１円札に肖像。
- 尊徳は神道・儒教・仏教の良いところを取り入れた哲学で農民を指導し、そのやり方が主君大久保忠真公より「そちのやり方は論語に言う『以徳報徳（徳をもって徳に報いる）』であるな、との言葉をいただいたことから、後に「報徳仕法」「報徳思想」と呼ばれた。

北海道の報徳運動による開拓

- 古くは、大友亀太郎による木古内・七飯の御手作場事業
- 亀太郎は後に札幌で舟運のための大友堀（後の創成川）整備
- 帯広での依田勉三による「晩成社」の取り組み（M16）
- 十勝豊頃町への二宮尊徳の孫の尊親の入植（M29）
- 峰延の小林篤一翁は、JA峰延設立と後のホクレンの生みの親

  ※JA峰延は当初から報徳を取り入れた活動を行っていた

  ※今でも広報誌に「報徳の教え」を掲載したコーナーがある
- さらに黒澤酉蔵は酪農で雪印乳業の前身の団体設立
- 漁業では安藤隆俊が後の信漁連を設立

代表的日本人（内村鑑三）

- 代表的日本人として西郷隆盛・上杉鷹山・二宮尊徳・中江藤樹・日蓮という五人の偉人をとりあげ、英文でその生涯を紹介。
- 本書は岡倉天心『茶の本』、新渡戸稲造『武士道』とともに、日本人が英文で日本の文化・思想を西欧社会に紹介した代表的な著作。

「キュウリを植えればキュウリを収穫する。人は自分の植えたものを収穫するのである」

　多くの教訓によって、尊徳は、自分のもとに指導と救済とを求めて訪れる多数の苦しむ人々を助けました。

私どもの同類であり同じ血を共有する、この人物の福音とくらべると、近年、わが国に氾濫している西洋の知とは、いったい何でありますか！

報徳の教え～四つの徳目

至誠（しせい）	誠を尽くして
勤労（きんろう）	よく働いて
分度（ぶんど）	分をわきまえ節約し
推譲（すいじょう）	余れば他の為に使え

推譲は人道でありSDGs

- 今日のものを今日むさぼるのは禽獣の道
- 今日のものを明日に譲り、今年のものを来年に譲る、これが人の道である。
- しかし、子孫以上への推譲は難しい。
- 子孫以上とは、親類・友人のため、故郷のため、国家のために譲るということ。
- 金だけでなく、道も、言葉も、功績も譲らなくてはならぬ。
- 次世代と子孫の暮らしに責任を持つ「祖先」として生きる

道徳と経済

- 人は二つの門をくぐらなくてはならない
- →「道徳門」と「経済門」の教え
- 「経済なき道徳は寝言である」
  - そして
- 「道徳なき経済は犯罪である」

尊徳が偉いのは、ともすると単純な良く生きるための精神論に陥りがちなところを、経済=働いて利益を出す（出し続ける）ということが大事であると見据えたところ

渋沢栄一の「論語と算盤」も、道徳と経済の両立を唱えている

今こそ生きる報徳思想の意義
～リーダーシップ論、日本論として～

- 利益（経済）至上主義の考え方に対抗する、日本が生んだオリジナルな経済思想

  →「経済と道徳」はどちらも大事、どちらがなくても不成立

  →「至誠と感謝」「分度と推譲」「実践主義」など理想の生き方としての報徳思想
- 「誠に感銘させる」「信賞必罰」「率先廻村」などのリーダーシップ論としての報徳思想
- 神儒仏による、日本思想史のエッセンスとしての報徳思想

報徳は実践を重んじる

- まずは理念だけでなく、計算によるコンサルタントだった
- 天の道、人の道
  - 天の道はあまねく草を育てるものだ。人たる我々はそこから、麦米を残し、雑草を取り除かねばならない。これが人の道である。
- 芋こじ
  - 里芋を樽に入れてかき混ぜると互いに汚れが落ちること
- 率先廻村
  - 自らが率先してものを見、またその姿を見せること
- 教えたことが了解できたならばすぐに実行するがよい

国家の乱るるは、虚文盛んにして実行の衰うるにあり

桜町時代の逸話

- 人心の荒廃極まり、衣食の不足、賭博、飲酒、喧嘩がやまないというありさま
- 立て直しのための実践取り組み
  - 率先廻村して現場を見極める
  - 用水を掘るなどインフラ整備を充実
  - 善人を賞し悪人を諭す信賞必罰の貫徹
  - 自らは粗末な衣服と粗食に甘んじる姿
- 事業が成功しないことを喜ぶ上司に困らされる
  - ついには嘘で訴えられたことで、意を決して村を二ヶ月にわたり離れ、成田山にて21日間の断食をし本願成就を祈る
  - 主君大久保公により嘘が見破られ、尊徳の至誠に打たれた村民は全員改心し、悪弊は取り除かれた。